わたしのぼくの郷

宇土市立宇土小学校六年　上塚恭司

ぼくたちの郷土宇土市は、熊本県のほぼ中心部にあり、昔から城下町として栄えたとこだ。東に雁回山、南西には宇土半島の山々が連なり、西北部は、春先き、潮干狩でにぎわう遠浅の海、有明海に面している。気候が暖かで自然に恵まれた田園工業都市といえるが、別府―阿蘇―雲仙を結ぶ国際観光ルート上にあり、貿易港三角と熊本、延岡を結ぶ交通の重要な地点としても知られている。

古代「火の君」生まれの地である宇土市一帯は、歴史を物語る遺跡や文化財も三十を越える数になっている。一五八八年小西行長が築いた宇土城もその一つだ。一六〇〇年行長が、関ヶ原の戦いで滅んだため天守閣は加藤清正によって熊本に移され、現在は国宝「宇土櫓」として、昔の面影を残し、その城跡が市街地の西のはずれに名残りをとどめている。宇土山地の東のふもとに、肥後三名泉の一つである轟水源がある。清らかな水が年中絶えることなく湧き出し、今も町の一部に給水しており、石管水道では日本で最も古いものといわれている。

歴史の町宇土市には、祭りもたくさんみられる。中でも八月の地蔵祭りは、熊本県三大夏祭りの一つにあげられるほどだ。名物「造り物」が町内ごとに出品され賞を競い合うので、お祭り気分が出て楽しい。この日、宇土市の人口は三万人もの人出を加えて、十万近くにもふくれ上がる。

この頃、三号線、五十七号線沿いには、大きな工場が立ち並び開発の仕事が次々と進められている。市の中心には、市民会館、図書館などの文化施設も整えられ、ぼくたちの学習にも力が入れられてきた。

ぼくは、豊かな自然に恵まれながら進歩する宇土市に育っていることを誇りに思っている。宇土の子どもとして、ふる里の歴史と伝統を大切に守りつづけていきたい。

カメラ探訪

文学のふる里

その9　南関の外目（ほかめ）の家
（北原白秋生家）

思い出　――北原白秋――

白秋は当時のいなかの風習にしたがい、母の郷里南関で生まれた。「私の第2の故郷は肥後の南関であった。南関は柳河より東五里。筑後境の物静かな山中の小市街である。その街の近郊外目の山あいに……天守造りの真白な三層楼があった。それが母の生れた家で…」。これは「思い出」の「わが生ひ立ち」の一節である。　いま、三層楼の家は改造されて2階建てとなっている。